昔懐かしい田舎の村

阿佐集落は、座間味村を少し東に行ったところにある、小さな集落です。集落の中央には、拝所という神聖な場所と、第二次世界大戦の艦砲射撃を生き残った、樹齢百年を越えるフクギがそびえたっています。村の裏道を歩いて下ると、赤瓦の屋根の上に家を守るとされるシーサーが付いた、槙でできた数多くの古民家に出会います。

一つの道の終わりには、船頭殿の石垣または「船頭の壁」として有名な、巨大なサンゴ石の壁に囲まれた空地があります。琉球王朝（1429-1879）の時代に、座間味は、沖縄と中国の間を貢物や使者を乗せて航行する船の中継地点でした。これらの船は、風向きが良くなるまで待つために、よく安護の浦に錨を下ろしました。中国貿易に関わることは、お金持ちになるための確実なルートの一つだったので、「船頭の家」という言葉が、壁に囲まれた裕福な住民の総称として使われたほどです。2m の高さと 8m の横幅を持つヒンプン（邪悪な魂を退けながら、家の入口を隠す直立した壁）も、非常に巨大です。